

# 作庭実習「森をつくる」7

## 環境共生園について (2)

岩村 伸一<sup>1)</sup>・坂東 忠司<sup>1)</sup>

### Seminar in Garden Design “To Create a Forest” 7 On Kyoseien Garden (2)

Shinichi IWAMURA and Tadashi BANDO

抄 録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしています。参加者は、体を使って空間を変えることに取り組みます。2007 年度も附属環境教育実践センターの環境共生園をその舞台としました。今回は岩村と坂東で、植物という観点から共生園について考えています。

キーワード：庭，森，環境共生園，植物，遊び，芸術

「良い薬は口に苦い。」たとえば、そんな言葉が浮かび上がってきます。この成句が「良い薬が口に苦い。」にかかわると、「良い薬」という範疇の輪郭と「口に苦いもの」の領分の比率に違いができて、文章の意味が変わってしまう…などと考えたりしながら、草を抜いています。葉の散ったヤハズソウの少し赤味があった根元に、中指をかけて上に引く。地面は前日の雨で適切に湿気を帯びており、程よい力加減で抜きあげることができます。目の前に密生しているそれらに、次々と指を絡めて抜き続けています。先ほどからこの行為を繰り返しているのです。なかなか良い手ごたえ。この感触は一定のリズムとして体に響いてきます。

「良い」も、またおそらく「薬」も曖昧な表現であります。何に対して良いのか、誰に対して薬として働くのかを考えますと、この言葉を発するには、前もって基準としてのなんらかの意図が用意されていなければならない。ここには、ひとつの観点が不変＝普遍なものであるかのような想定があります。この場合、「口に苦い」のですから、「何」あるいは「誰」はこの口の主ということになり、その者の属性が問題となるようです。おそらく、癒され、直され、治療されるべきひと、この成句を採用する社会にとっての良き人間像のような者たちが対象として想定されており、繰り返すと、それらの口に苦いということでもあります。常に澄んだ水であることを望む、善であろうとする人々でしょうか。このあたりでこの言葉が急速に、わたし自身から遠ざかっていくように思えました。それでも日々の身のまわりにあった人々の顔を想い

1) 京都教育大学

並べたりしています。その時不意に、昨夜読んだ書物を思い出しました。「…文字どおり聖人と言うべき活動的な慈愛の化身に出会う機会があったとき、そのような人たちはたいていの場合いそがしい外科医のように、陽気で、積極的で、無頓着で、荒っばい様子をしており、人間の苦しみを目のあたりにしてもなんの憐れみや同情も浮かべず、その苦しみにぶつかることを少しも怖れない顔をしていたが、これこそ真の善意というものが備えている優しさのない顔、反感をそそりはするが崇高な顔なのである。」<sup>(1)</sup> (昨夜はどうやらこのあたりで眠ったようです。) その文章の示すもののイメージが唐突に訪れて、少し驚きました。ひとはおそらく、思いや意思といった、なんらかの力のようなものを背景としてしかもそれらによりかかりながら生きることになる。そんな感慨を抱きながら、それらの反面としての、濁った泥水への憧れのような渴きを感じてもいるのでした。

草を引くという作業は、わたしには概ね、快=心地よいものとして作用します。草叢にしゃがみ込んで、一本一本の根元に手をのばして力を加える。その音、草のつぶれた青臭いにおい、掘り起こされた地面の発するにおい。瞬間的にそれらに包まれます。その草の種類、育ち具合、根の張り方によって手ごたえが違うのですから、力の加え方もそれに対応させていかなければなりません。上体の筋肉の動き、足の踏ん張り、全身を使う活動です。抜きあげた根についてくる土を振り落としてはその獲物を右側後方へ向きを同じに積み上げて、少しずつ移動していきます。やがて、自分の体とその作業との間にひとつの理解ができ、折り合いがついてくると、あるリズムが生まれ、作業の流れができてくることになります。

作業の時間が動き出し自分がそれに集中してくると、不意にこんな「思いのようなもの」が絡み合うようにしてやってきたりするのでした。もともとそれは具体的な言葉やイメージであったのかもしれない。わたしという意識のスクリーンの広がりの上に、ある固有の色や形を持って、ひとつの図像やときには影であるかのように移動している。例えば先ほどの書物の断片も、文章の集合体としてではなく、意識の中に一種の気分としてとどめられており、空気の塊(かたまり)のようなものとして意識内の視界に現れました。そんなものがいくつか浮遊してスクリーン上に展開しているのでしょうか。そして、それまで直接には関係を持たなかった記憶や想念であったものの断片が、連想や比較を通して、組み合わせられ、連結され、再度関係付けられることで、その都度、「意味のようなもの」が一時的に発生したりする。漠然とした思いとでも言うのでしょうか。こんな時間に没入すればするほど、わたしの内でいくつかの意味が組み立てられ、結果として様々な判断をとまなう意識の層が確認されることになります。しかもそれらは明滅しては消えていくのです。なかなか興味深い…。

「先生、一服する時間が来ていますよ。」近くで作業していた学生に声をかけられて、急に具体的な景色を回復しました。2007年秋、良く晴れた午後のゆるやかな陽射の中、附属環境教育実践センター南の草叢に、何人かの学生たちと一緒に頭を突っ込んでいるのでした。この年も作庭実習は環境共生園を主な舞台としており、既に何回かの実習時間を草刈に費やしていたのですが、新しい受講生にはいまだに、これまで数年の実習での取組の成果は見えてこない。ここに共生園があると言っても、身の周りを囲む雑草の盛り上がるような広がりしか目にするのができませんでした。今回の草刈は例年になく大変です。

共生園での作庭実習は毎回、半年間放置されていた間に伸びた草を刈り払うことから始めています。そうしなければ造園作業に入れません。前年度までの造作の積み重ねを見なければ、次のやるべき仕事が方向付けられないからです。それだけではありません。このところの受講生のほとんどが、体全体を使った作業というものにしっかりと向き合った経験がなく、庭仕事に戸惑ってしまうという事実があります。それには草を引くことから始めて、少しずつ体を慣らしていくことが良いように思えました。草刈は、この作庭実習の準備段階にあたるわけです。

が、今回は少し様子が違ってきます。「準備」などという軽いものではないのです。この場所での作業を記録している『森の作業日誌』をめくりますと、そのあたりが見えてきます。2004年度の記録には、全員で草引にあたったということは書かれていません。最初から土を入れることに集中し、草刈はその合間に数人で行っています。2005年度は参加者全員での草刈は2コマの作業を2回。手で抜き取る以外に用具として、カマ、両手バサミ、剪定バサミ、ナイロンコードカッター使用の刈払機を使っています。他にアレチヌスビトハギやハリエンジュの根を掘るため、スコップも使いました。2006年度も同様に3.5回。年ごとに、庭としての造作を施したところが増える分、これまで以上に広い場所が草刈の対象となります。一面のネコジャラシの草原に、ナイロンコードの刈払機4台が大活躍しました。

今回2007年度は、初日10月18日から苦戦しました。昨年あった、風に揺られている草原のイメージとはまるで違って、植物が層になって重なりもつれ合い、盛り上がるような厚さを感じさせます。前年同様4台持ち込んだ刈払機は、ローターに草が絡まるばかりで、ほとんど有効ではないのです。この1年で共生園の草地は大きく成長し変化していると実感しました。去年は手で引き抜けた草も今年はスコップやツルハシを必要とします。引っ張って手繰り寄せることができたツル類も絡み合い木を締め上げて、ハサミを使って丁寧にはぐしていかなくては取り払うことができません。内心、この変化に驚き、途方もなさを感じたのですが、同時に、腰をすえてこの草叢に取り組むことの重要性も感じました。まずは体を慣らしていくことも兼ねて、ゆっくりで良いから、草の根もとを一本ずつ確認し、しっかり持って引き抜いていくこ



とからはじめたのです。最初の 2 回を終えた時点では「まだ昨年度の作業跡は見えてこない。」と日誌に記してあります。結局、計 6 回をかけて、少しずつ少しずつではありましたが共生園の全体像が見えるようになりました。「もう草抜きは飽きた。」と言いながらも、丘の一番高いところから満足げに周囲を見まわしたのは 11 月 29 日。そこには頭のとっぺんから地下足袋の先まで「ひっつきむし」まみれになったたくましい仲間が並んでいました。結果から見ると、草刈は今回の作庭実習の内容そのものになっているように思えるのです。

ここで、この環境共生園への植物の導入について年度を追って述べておこうと思います。今回の報告では、植物という視点からこの場所を見直してみようと考えています。

前回の報告（環境教育研究年報第 15 号『作庭実習「森をつくる」6 環境共生園について (1)』）にも書きましたが、1999 年度と 2000 年度は環境センター南面のフェンスと当時あった宿舎の間、現在の共生園敷地の北端部分での作庭でした。1 年目はフェンス北側の樹木見本園からカイヅカイブキとマサキを一本ずつ移植。2 年目は、瀬戸内寂聴氏宅の庭改築現場で不要になる、比較的大きく育った、カシ 4 本、コナラ 3 本、クロマツ 2 本、サワラ 1 本を作庭実習メンバーで移植しました。その途中、根の鉢巻（根を掘り起こし荒縄で固める作業）が甘かったと思われるカシ 1 本とコナラ 2 本は枯れてしまいましたが、今はこの場所に根を張って主要な樹木として成長しています。またこの年は、当時の『ふれあい教室』のメンバーに、小さなポットで育った苗 42 本（コナラ 10、ミズナラ 8、クヌギ 7、ブナ 5、カシワ 2、コブシ 5、ヤマモミジ 2、ヤマザクラ 3）をその整地した地面に自由に植えてもらいました。「…あらしのような 1 時間。少しつまりすぎだと思うが、すべての木が生きのびるとはかぎらないし、少し大きくなって移動することも可能だろう。」と日誌にあります。現在この部分は、枯死した苗もいくつかあるものの、見本園と共生園をつなぐ繁みとなって、小流れ上流の石組にかぶさってきました。2002 年 2003 年あんなに繁茂していたセイタカアワダチソウやヨモギも木々の枝葉の陰が地面を覆うようになるにしたがって姿を見せなくなり、まわりに落とすドングリからいくつも芽が出て、次代を期待できる状況になりつつあります。これは小さくはありますがひとつの森の姿であると思えます。

宿舎がなくなって 2004 年度には、2000 年度に着手した涸れ流れを南へ延ばしはじめ、その周辺に真砂土を加えて野筋（のすじ）を整え、新しい庭に定植するように苗木を植えました。一応森であることを想定した選択ではありますが、どういう木がこの場所にあっているのかわからないということもあって、いろんな種類を植えています。納品書を見ると、カヤ、ツガ、ハクサンボク、アカシデ、リョウブ、シイ、アキグミ各 1 本、シャシャンボ 2 本、ヤマザクラ、ヒサカキ各 4 本、アカマツ、ヤマモミジ各 5 本となっています。2005 年度には共生園中央部分に重機を使って池と丘をあらわす地形をつくり、それに沿ってやわらかい野筋をつくることに苦心しました。前年同様、アカシデ、ハシバミ、オトコヨウゾメ、ガマズミ、アオダモ、エゴノキ、アブラチャン、サワフタギを 1 株ずつ購入し、定植して支柱を施しています。

ここまで（2005 年当時）の共生園での森づくりは、何も無いところに木を入れていくといったこともあって、わたし自身 10 年にわたって経験した庭仕事の現場の方法・技術をその基本として進めています。職人としてのやり方と呼んでもいいかもしれない。森をつくると言いながら森の姿を想定した庭をつくっているわけです。だから、はじめから一気に変化させようと

して、既に大きくなっている樹木を導入しましたし、株をバランス良く配置し、各年度の終わりには支柱や水鉢まで施して整地で締めくくっています。さきほど引用した日誌の、小さな苗が根付いたら後日移動させてバランスを整えようなどというメモは、植木屋の考えそうな事柄です。この場所での作業にはプロも何人か関わっているのですから視覚的にはこなれたものになりますし、まとまったものになるのは当然のことでした。これで森がしてくれるのだろうかという漠然とした不安、なんだか釈然としないものが残ったのも事実です。

が、それも一時のことでした。庭としてコントロールすべき領域が広がるにつれて無理が生じてきます。ひとつはここ数年の夏の日照りです。はじめのうちは長いホースを手に入れ、また散水のための水源も確保して、夏に数回水やりを行っていました。それでも毎日やれるわけではないので次々と苗は枯れていきます。それに、森に水をやるというのはいかにも滑稽です。もうひとつ、共生園の北部から中央部にかけての草の繁茂がありました。作庭当初は野筋の保水等に役立つだろう下草も、ここまでになると事情は変わります。ひろがった庭で勢いを手にして爆発的に生い茂りました。ヒルガオ等のつる植物、中でもツルマメは急速に勢力を拡大し(草刈の間、豆のはじける音が聞こえ続けます。)あたりを覆いつくし、移植したばかりの木々を締め上げ、這い上がっていきこうとする。まだ根の張れていない苗には大きなダメージとなり、流れ沿いの苗木のいくつかは、ねじれ立ち枯れてしまいました。この広い空き地にやわらかい土を入れ、それを放置しこの場の自然の成すがままにすればどうということになるのか。導入した苗のそれぞれに責任を持ち、庭を成立させようとする者にとっては、このバランスの崩壊は、残念であり不満であります。当然水をやり雑草を刈らなければならないことになる。毎日この場所に関われない以上、それは不快としても働きます。庭として状態を保つには、ひとりふたりの職人ではなく大勢の手当てが必要になるでしょう。わたしたちの条件下では、はじめから無理であることは見えていたことなのです。考え方を変える必要がありました。これらをマイナスととらえるのではなく、前向きにとらえること。このこと自体は自然であり、この場の成り行きに任せてみること。

なんだか釈然としないと述べたのも、このことに関係していると思われまます。2005年度の实習では植木屋から購入した株の定植と並行して、終わり方の1コマで坂東研究室のメンバーによって、彼らの育てたカシヤシイの小さな芽生えが池の西側の丘の上に植えられています。その前年から準備されたもので、庭をつくるという発想だけでは早晚行き詰ってしまうということが予測され、対応を考えていたことがうかがえます。残念ながらその芽の多くはその夏を耐えることはできませんでした。2006年度、今度は岩村宅(子どもたちがちいさかったとき拾ってきて埋めたドングリが大きく育ち、その下で実生の苗が邪魔になりつつある。)からコナラやクヌギの発芽苗を持ってきて、昨年同様に植えました。同時に、コナラ、クヌギ、シイ、ヤブツバキ、ケンボナシの実をばら撒いています。また、納品書を見返しますと、この年(2006年度)植木屋で購入したのは大量のポット苗でした。イロハモミジ10、ヤマザクラ10、クヌギ12、コナラ12、アラカシ6、シラカシ6、スダジイ10、ツブラジイ10、ヤブツバキ20、ソヨゴ10、トチノキ2、シバグリ3、シャシャンボ2です。これらを共生園敷地全体に散らすように定植しました。その場所の条件(水、光、土などの自然条件だけではありません。近所の子どもたちにはこの場所は格好の遊び場ですし、犬の散歩にもおそらく最適です。)に適った

ものだけが根を張り生き抜くことになるでしょう。そのほかに、この年度の造園は池の南西面の石垣と、池の南側一帯に石積を施した畦を持つ3面の段々畑だったのですが、斜面の補強のために庭現場で不要になったリュウノヒゲ、カンゾウ、ヒガンバナ等を導入しています。そしてそれらの結果として、はじめに報告した2007年度の果てしないように思えた草引があったのでした。

この数年間でここに意図的に持ち込んだ植物と、この場にやってきた植物。そのせめぎ合いと、それに割って入ろうとする作庭者の意図。おそらくそれが、庭の真実であろうと思います。まして、ここを森として認めようと考えているのですから、ゆっくりと見つめ、じっくり付き合うことが肝要になります。どうやら草木にはそれぞれの持つ技があるようです。いったん手を止めて、自然にまかせてみる。森をつくるにはこれ以外に方法はないのでしょうか。2007年の作庭実習が始まる少し前、共生園の現状を掴むため、坂東と植生調査を行いました。ここでいったん坂東にバトンタッチします。



共生園の植生 (予報)

共生園の地形の原型ができあがってから1年半を過ぎた2007年秋、一面は背丈ほどもある多くの植物に覆われていました。優占的に生育している植物は、場所によってかなり異なっているように見受けられます。今後植生がどのように変化していくのか大いに興味のわくところですが、そのためには植生の現状を記録しておく必要があると考えました。そこで、岩村と9月25日から数回にわたって調査を行い、植物群落の概要図を作成することになりました。



調査は、岩村が測量・作成した共生園の見取り図に優占植物の分布範囲を書き込んで行くという方法で行ったのですが、ツルマメやヤブガラシのつる植物に加え、果実の熟し始めたアレチヌスビトハギの群落に行く手を阻まれ、まさに藪こぎ状態での調査でした。茂みから出てくると全身に隙間がないほどアレチヌスビトハギの果実がくっついていました。衣服に張り付いたくっつき虫を取るのに相当の時間がかかったことを思い出します。以下に、共生園の植生の概要を北部から南部へと順に示したいと思います。

<北部> 表面的には純群落のように見える北部のツルマメとアレチヌスビトハギの群落ですが、地表近くにはヤハズソウ、アレチギシギシ、イヌタデ、クサキビなどの植物も多く生育していました。また、ツルマメ群落の西側（消防学校との境界付近）にはセンダンの木の下一面にドクダミの群落が広がっています。さらに、北部の東側（学生寮・附属高校の門に通じる道路側）には大型のイネ科植物セイバンモロコシがアレチヌスビトハギに混じって生育しています。一方、東側道路に接する場所には幅 2-3m、南北 30m にわたってメヒシバの群落が、その内側（西側）にはヒメムカシヨモギ、ヤハズソウ、エノコログサの群落が形成されていました。



共生園の北部を中心に、旺盛に繁茂するツルマメ（上左）とアレチヌスビトハギ（上右）及びツルマメ群落に混生するアレチギシギシ（下左）と北部のセイバンモロコシ（下右）

＜中央部＞ 共生園の中央部には長径約 20m、短径約 10m の低地があります。当初は池として造られましたが、蚊の発生防止などの対策で現在は常時排水口が開いた状態になっています。低地であるために土壌湿度は相対的に高く、この場所の植生は特徴的なものとなっています。草丈は 1m 以下のものが中心で、イネ科のアキノエノコログサ、キンエノコログサ、イヌビエ、ケイヌビエ、シマスズメノヒエ、コブナグサの他、ヤハズソウ、メリケンガヤツリなどが密生しています。また、数株のヒロハホウキギクやアメリカセンダングサも確認されました。池の南部から東北部には、ヤハズソウの純群落が池を取り巻くように発達しています。

また、池の南側には三段の小さな棚田式の平地がありますが、ここの植生は池にも多く見られるアキノエノコログサとキンエノコログサが中心で、上段はアキノエノコログサとヤハズソウが入り交じった状態で生育し、中段はキンエノコログサの群落にケイヌビエが混じった状態です。一部にヤハズソウの純群落が島状に入り込んでいます。下段はキンエノコログサが純群落に近い状態で繁茂しています。さらに、中央部西側は高台になっていますが、この場所はヨモギやメマツヨイグサが全体に広がり、一部にセイタカアワダチソウの群落が見られました。

一方、道路に面した東側はヒメムカシヨモギを中心とした群落が形成されており、サンゴジュの木の下にはツユクサの小群落が見られました。



アキノエノコログサ (上左), キンエノコログサ (上右), アメリカセンダングサ (下左) 及びヤハズソウ (下右)

<南部> 南西部の高台に続く部分で、背の高いキクイモに続いてセイタカアワダチソウ、セイバンモロコシ、ヨモギを中心とした群落広がっています。また、南東部はアレチヌスビトハギが旺盛に繁茂していますが、その大半はヤブガラシに覆われていました。道路に面した部分には、メヒシバとイタドリの群落が見られました。



キクイモ (上左), セイタカアワダチソウ (上右), ヤブガラシ (下左) 及びイタドリ (下右) いずれも生命力の強い地下茎を持っている。

以上が、共生園における植生の概要です。整地後に風や動物によって散布された種子が発芽することで、この場所に生育するようになった植物が存在しているのは当然ですが、これらの植生が発達したもう一つの要因として運び込まれた土が考えられます。ピオトープづくりの際にもしばしば問題になることなのですが、作業の過程で水田土壌が持ち込まれると、そこに含まれるさまざまな種子が発芽して初期の数年にわたって(たいていは3,4年)水田雑草が発生してきます。さらに年月を経るにつれて、日当たりや周囲の植生などその場所の環境に応じた植生に遷移し安定するようになります。

共生園でも同様のことが起こっていると推察できます。すなわち、この場所に生育している多くの植物は、持ち込まれた土壌に含まれていた種子や地下茎が発芽したものである可能性が高いと思われます。キクイモなどはその代表ですが、本来は風によって種子が運ばれるセイタカアワダチソウやヨモギなども、整地されてからの時間と群落の大きさを考え合わせてみると、

持ち込まれた地下茎の断片から発芽して群落を形成したと考えられるからです。また、土壌の水分条件によって、発芽・生育する植物種が選択された結果、高台と池の部分で植生の違いが生じたことも重要な観点であると思います。さらに、かなり多様な植物が確認できるもう一つの要因として、持ち込まれた土が単一の場所からのものではなく、複数の場所から持ち込まれたことも見逃せない要因であると考えられます。今後も定期的に調査を重ね、共生園の植生がどのように遷移をしていくのかを追跡していきたいと思います。

共生園のような草原ではさまざまな活動ができます。大自然の中で見られる営みの一部を間近で確認することができます。草原が発達すると昆虫をはじめとしてさまざまな生きものが生息するようになります。植物あそびや昆虫採集を通して、また、生きた教材を確保する場所として共生園が機能するようにしたいものです。



もう一度、岩村です。さて、今回の作庭実習です。受講生に草引ばかりやらせてしまったことを、少し後ろめたく思っていました。授業であることを良いことに、本来大学が責任を持つべき草刈を学生にやらせているとられても、申し開きは難しい。何を言ってもおそらく言い訳のようになってしまいます。だいいちこの作業は普段あまり創造的行為とはされていません。以前、わたしが勤めたいいくつかの高校でも、停学中の生徒に罰として科せられる労働であったのを思い出します。が、前半にも記したことですが、わたし自身はそうは思いません。ゆっくりと取り組めばこんな面白いことはないと思います。例えば手で抜いていく場合の抜き方をとってみても、ある所から始めて除草された領域をどんどん広げていくような一般的なやり方、背の高いものから順に取り去って均一な状態にしていくような間引き透かすやり方、何らかの理由で草の種類を決めそれだけを抜いていくやり方など、それぞれに特有の目標設定があり、それらを組み合わせたりして、その都度方法を変えることも可能です。また庭仕事等の限られた時間内に取り組む場合でも、どこにどう手を加えると効果的であるかを考え、それを実行していくのもスリリングです。なかなか奥は深いのです。どちらにしる、その作業に

よって目の前の空間は大きく変わっていく…。

はたして実習参加者にはどうだったのだろうと思い、今回の草引について感じたこと・考えたことをメモの形でコメントしてもらいました。読みますと、やはり大変な仕事だったのだと思えば同時に、これが草引という作業から出てくるのかという驚きがありました。少し紹介します。文章はそのままです。

「草を引く。同じような作業を繰り返しているだけなのに、毎回の作業が新鮮だった。それは、何週間にも分けて、ゆっくりと時間をかけて行うことで、少しずつ季節が移っていくのが感じられたからだと思う。蚊がいつの間にかいなくなって、代わりにコオロギが顔を出していた。少し肌寒くなったと思ったら、何種類かの草も気がついたら枯れていた。また、晴れの日、曇りの日、雨の降った次の日で、土の表情が違って、それが感触や草の引き心地に違いをもたらしていた。こういった変化を実際に肌で感じられたからこそ、やはり毎回の作業が新鮮だったのだと思うし、暑くても、寒くても、かゆくても、疲れても、作業の後はなんとなく心地よかったのだろう。」<sup>(2)</sup>

「地面の少し下にめがけスコップを水平に（何度も）突き刺し、じょじょに根っこの下へとスコップを潜りこませ、ある程度のところまでいくと、てこの原理を使い、ゆっくり、ゆっくり（ここがポイント）と持ち上げていきます。細く無数にはえていた根っこが、ぶちぶちと音をたてながら抜けていく様子はたまりませんでした。」<sup>(3)</sup>

「最初は草がポーポーで、この土地に何があるのか分からず、平地が広がっているだけだろうと思っていました。しかし、草を手作業で、かがみながら引っこぬいていく過程で、へこんでいる所や、もり上がった所を見つけ、庭の様子がだんだんと理解していくことが出来ました。毎時間、少しずつその変化を知っていくことが楽しみにもなりました。」<sup>(4)</sup>

「…ねずみ、子ねずみ あんこのすけたまんじゅうみたいなかんじ。田んぼの土手の中へ逃げこむ。いやなかんじのやつじゃなかった。」<sup>(5)</sup>

「元々そんなに自然の多くないところに住んでいるのですが、最近、家の周りに駐車場や店などがどんどん建てられています。また、前は木がたくさんはえていた家の裏の山にも人の手が加えられ、うっそうとしていたのがすごくすっきりしてきています。急激に自然がなくなっている、というわけではないのですが、気づいたら減ってきている、という状況です。身近な場所で自然が少く少ないので、今回の草引きをしていると、私にとっては目新しいもの、珍しいものがたくさんありました。家の近くでは、あんなに植物は生えていないし、虫もたくさんはいません。いちいち虫を見つけては騒いでいましたが、バッタも道を歩いていて見かけることはあまりないですし、カマキリも、なかなか現れてくれません。まして卵を見たのも今回が初めてでした。（気付いていなかっただけかもしれませんが）トノサマバッタやエンマコオロギも初めて見たし、カメムシでさえそういえばあまり見たことがなかったな、と気付きました。…」<sup>(6)</sup>

「10月から12月まで共生園で草を抜きました。草むらに頭をつっこんで、文字通り草抜きに没頭していました。ふと、この没頭していた時間と、家から香里園の駅までの40分の道のりを歩く時間とは、なんだか近いのではないかと思います。この時間とは、わたしの中で流れているもので、それは草を抜いたり、歩いたりという連続する作業中、それまで時計や他の

人に合わせていた体と心のリズムが、だんだんそこから切り離されて独自のリズムになる、その一連の流れではないかと思います。この時間を最も感じたのは、最近ではこの2つのことでした。小さい頃には、一人でする人形遊びもこの時間でした。人形というか、わたしはいとこのお下りのミニカーを30台ほど持っていたので、これを順番に並べ、行列を少しずつ前に進め、部屋中を回るということをしていました。テーブルや、コタツ、部屋の隅、カーテンの向こう側、天体望遠鏡などを、世界中のいろいろな場所と見立てて、ミニカーの一群がそこを回っていくのです。これはただ単に、ミニカーを順番に動かし続けていくことが、一番大切なところでした。淡々とミニカーを動かす、すると、だんだんこの時間の枠の中に、言葉にならない言葉や、リズムにならないリズムが満ち満ちてきて、その中にわたしは浸りきるようになります。ある瞬間、その一角がだしぬけに言葉になってポンと浮かび上がる。これは考えているというよりは、勝手にあふれ出てきたものだと思います。草を抜く時も同じことが起きます。その時の言葉を覚えていれば、今ここに書くこともできますが、わたしは再現できません。何かに役立てようという気が初めからなかったからです。歩いている時には、まだこれらの言葉を捕えることができるのですが、草抜きの時間はもっと言葉未満の部分の大きいようです。そしてそれは、休憩時間の直前が一番膨らんでいます。」<sup>(7)</sup>

ひとつの目的のもとに協働して進めているにもかかわらず、ここには様々な思いがあります。短い文章からではありますが、作業者ごとに見方があり、発見があることが分かる。後ろにそれぞれの目を感じられます。作業をすすめるひとりひとりの意識に寄り添うかのような文章です。わたし自身も絵を描くときに、感じたこと考えたことを素早くメモ書きする癖がありますが、後日読み返すと実に面白いし役に立つ。それには、練り上げられた文章群にはない、その瞬間のわたしや生な制作の場の空気が備わっています。わたしはこんなメモが大好きです。

共生園計画の始まりから現在までの時間の中で空間は広がりました。それに従って考え方も変わってきました。今では草が生い茂りいくつもの植物がせめぎあっているこの空き地は、また多くの意識がさまよう場所でもあるのです。それは参加者によるメモが示していることから明らかでしょう。共生園の成立にとってこの多様性は重要であると考えています。ひとつの場がいくつもの思いを同時に立ち上げ成り立たせている。その中で様々な意味が生まれ消えていく…。

「わたしたちはこの空き地で遊んでいる」と前回の報告の終わり近くにあります。この「遊び」は仕事に対置するものとして使ったのですが、同時にわたしの子どもの時代の遊び、その都度新しい意味を組み立てては意味の間を移動して遊ぶ空き地での遊びを重ね合わせて使ったのでした。ここで、環境共生園について「遊び」という観点から考えておこうと思います。

フランスの哲学者ジャック・アンリオは、遊びについての考察の中で、「けっきょく、遊ぶこと〔行為〕によって遊び〔構造〕が意味をもつのであり、しかも遊ぶこと〔行為〕それ自体は遊ぶ存在〔人間〕がとる態度とのかかわりによってはじめて意味をもつのである。」<sup>(8)</sup>と述べて、遊びの構造の分析から遊ぶ主体の方へと論を進めていきます。同様にこの共生園においても、そのかたちや位置づけの分析に加えて、この場所に入出入りする一人一人に焦点をあてる

ことが重要になるでしょう。

ここにもうひとつ、遊びに関連する面白い論述があります。教育学者である西野範夫の「造形遊び」に関する文章です。当然、小学校図画工作科の内容についての議論であるのですが、共生園の意味を考える上でも関係があると思い引用します。ここで西野は、造形遊び導入の頃の経緯や現在の状況を踏まえて、造形遊びの再定義を試みています。「そもそも、子どもたちの行為によって提示されるものは、自己充足的な作品ではない。それをつくりだした子どもたち自身が、むしろそれから離れ、そこで対象として提示されたものは特定の価値や意味として固定化することなく、常に開かれ、流動的に意味を更新していくのである。そのようなものこそ、まさにテキスト的な意味空間に他ならない。」<sup>(9)</sup> また「…より重要なことは、そこでの行為の結果としての作品ではなく、その行為がどのようなものであったのかということである。つまり、その行為の在りようこそ本来の意味がある。そして、その行為の在りようとは、子どもたちによるとどまることのない意味生成活動に他ならない。」<sup>(10)</sup> と述べ、次のような定義へと導きます。「造形遊びは、子どもたちが自分の造形的な行為の過程や結果をテキスト的なものとしてとらえ、それに関わり、つくりかえ、新たなものをつくりだすという限りない意味生成の活動を保障しようとするものである。そして、このようなテキスト的な意味空間における意味生成の活動こそが、子どもたちの芸術活動であるということが出来る。」<sup>(11)</sup>

さらに、西野の文脈は図画工作科教科調査官として造形遊び導入に託した当時の思いにふれながら、今日の教育が抱える課題に対するものとしての期待へと導きます。「造形遊びは、あくまでも子どもの論理から〈遊び性〉の働きに着目したものだ。そして、その着目した〈遊び性〉は、子どものことだからという観点でとらえられがちな〈幼い戯れ性〉ではなかった。それはあらゆるものの惰性化、固定化（抑圧となる）した状況を〈ひらく〉働きに着目したものであったと言えるだろう。そのことは今日のあらゆることが閉塞しつつある状況を考えたとき、最も緊要な課題を担っていると考えられる。」<sup>(12)</sup>

これらは、子どもの造形活動について述べた文章なのですが、空き地での子どもの遊びやそれにパラレルするわたしたちの森づくりに重なるように思えます。いやそれどころか、美術そのものについての記述に思えてなりません。

美術について言い尽くそうとするとこれは厄介な仕事でしょうが、ここでは敢えて簡単に自分なりに述べてみます。「目の前のモノに手を伸ばし、身体を使って作業（制作と言われることが多い）をする。結果としてモノは変化（作品と呼ぶこともある）する。次にそれが見られることによって、その空間が変容するなどの何か（起きないことが多いかもしれない）が起きる。そのモノがコトになるかのような現象を経て意味が立ち上がる。」この一連が美術の構造です。美的価値は物質の対象ではない<sup>(13)</sup> のです。「しかし、この一瞬の意味の成り立ちはすぐに失われていく。なぜなら、一度意味となり言葉に置き換えられたものは美術の対象からはズレ落ち、次の現象を生むための基準になってしまうから…。」やはり厄介になりはじめました。今回は情緒的な表現に置き換えておきましょう。美術の現象というのは、例えば濁流の上にあられる引つ掛かりや淀みのようなものであり、一瞬の意味はその形のようなものです。流れそのものによって、かきまぜられ突き動かされてしまいます。だから制作を繰り返し、作品を作り続けて、もう一度見ようとします。その都度、意味を立ち上げ掴もうとすることになりま

す。西野の言う「意味生成の活動」を思い起こしてください。そっくりでしょう。同じような構造がそこにはあります。

もう一度、ジャック・アンリオに戻ります。アンリオの遊ぶ主体の研究は《わたし》というものを経て、人間の活動そのものにとどり着きます。「遊びとは人間が自身から逃れる運動であると考えたパスカルのような悲観論の考えかたに対して、近代の思索者は結果的に楽観論とってよいようなものを見かたを対立させる。その見かたによれば、遊びは人間が自己をつくる運動と見える。」<sup>(14)</sup>と述べながら、「人間は、自然の中へ遊びを導入する存在である。」<sup>(15)</sup>とし、芸術を導き出していきます。そして、次のような言葉でその論『遊び』を結んでいます。「自己自身のドラマの作者であり役者である人間は詩人として姿をあらわす。彼は、何も遊ばない—何も彼なしで遊ぶはずのない—この宇宙のなかで、この自然のなかで、ただひとりの詩人である。この自然のなかでは、ラシーヌの一行の詩句のかよわいハーモニーや、ファン・ゴッホのキャンパスの上の斑点の鋭い色調や、モーツァルトのアンダンテの悲しさにニュアンスを与える言いようのないほほえみのほうが、この世の最初の日の夜明け以来のすべての風と波のざわめきよりも、いっそう大切な、いっそう重要なものとなるのだ。」<sup>(16)</sup>

おそらく言葉は、ひとたび外に出されると、すべては意味の固定という方向へ作用することになります。人はそうして認識しようとする、流れに矢を放ちとどめようと努めるわけです。何度も何度も言葉を発する。が、人そのものも流動的であることを思えば、依然として流れることこそが本質であります。わたしたちの「森をつくる」においてもひとつの観点から見続けることはおそらく不可能です。多様な価値を導き入れなくてはなりません。この森がそのことを示しています。

この環境共生園はもともと附属学校も含めた大学全体の環境教育の実践の場として構想されたものであることは、既に述べたとおりです。とすれば、この森との関わりで成立していく教育とは、どういうふうにとらえることになるのでしょうか、どういうものとして可能になるのでしょうか。



## 註

- (1) マルセル・ブルースト 鈴木道彦訳 (2006) 『失われた時を求めて I スワン家の方へ I』 集英社 pp.183-184
- (2) 3 回生 高坂有梨 部分
- (3) 4 回生 森岡輝次 部分
- (4) 3 回生 藤井麻理 全文
- (5) 森の作業日誌 2007・11・29 の記述 部分
- (6) 3 回生 守安藍子 部分
- (7) 3 回生 岡林利江 全文
- (8) ジャック・アンリオ佐藤信夫訳 (2000) 『遊び－遊ぶ主体の現象学へ《新装復刊》』 白水社 p.33
- (9) 西野範夫 (1997) 「子どもたちがつくる学校と教育第 13 回」『美育文化 Vol.47No6』 美育文化協会 p.56
- (10) 同上
- (11) 西野範夫 (1997) 「子どもたちがつくる学校と教育第 14 回」『美育文化 Vol.47No7』 美育文化協会 pp.55-56
- (12) 西野範夫 (1997) 「子どもたちがつくる学校と教育第 15 回」『美育文化 Vol.47No8』 美育文化協会 p.61
- (13) このことにマルセル・ブルーストはたびたび言及する。例えば、上掲書 p.314 その訳注で鈴木道彦は「『失われた時を求めて』は、作品の美と等価値のものをゆっくりと成熟させていく過程を描いた小説とも言えるだろう。」と述べている。
- (14) ジャック・アンリオ佐藤信夫訳 (2000) 『遊び－遊ぶ主体の現象学へ《新装復刊》』 白水社 p.170
- (15) 同上書 p.171
- (16) 同上書 pp.171-172